

Special Essay



読むことの楽しみ

医学部公衆衛生学教室

石原 陽子

光陰矢のごとし、今年も残すところ1ヶ月余り。年末の書店は、なぜか結構混雑して年の瀬を感じさせる。年末年始、仕事から離れて時間に制約無く読める探偵小説は楽しい。年末は、12月に新刊がでるパトリシア・コーンウェルの検屍官ケイ・スカーペッタのミステリーを携えての帰省だったが、このシリーズも終了して久しい。時々、アガサ・クリスティやコナン・ドイルなどの古本を読み返すことがあるが、ストーリーを知っていても何故か楽しめる。日本でも放映されたBBC放送製作のシャーロックホームズ、ポアロ、ミス・マーブルのシリーズTV番組は、留学中の楽しみの一つだった。

最近、書店に山積みされた本の多さと種類に圧倒され、その中から読みたい本を探すにはかなりの時間と労力を要する。新聞や週刊誌の書評や広告から本を選択してインターネットで購入しているが、当たり外れも多く、身近に残しておきたいと思う本は少ない。留学のため下宿を引き払う際に、10-20代に読んだ本を全て某国際病院移動図書館に寄贈した。その中でもう一度読みなおしたい心に残る小説として、漱石の「草枕」とロマンロランの「魅せられたる魂」がある。怖いもの知らずで若さだけはあったあの頃とそれなりに人生を歩んだ後で読み直した時の読書感の違いを味わう、それも読むことの楽しみの一つであろう。

長年、発売日を楽しみしている「週刊朝日」の読者投書コラムがある。「イヌばかネコばかペットばか」という動物についてのそのコラムは、年に一つか二つ際立ってすばらしい投稿があり、その文章力に感嘆させられる。その源は、虚実ではなく実在する動物への慈しみを漏れ出すように書き綴ることによる、リアリティとヒューモアに富んだ文章にあると思う。文章の上手下手は、文法的に間違いが無いとか、格調高い文体であるとかだけではなく、書き手の気持ちが真摯にどれほど込められているかということも重要であろう。大作家大佛次郎は、多くの著作を世に出したが、彼が自分の作品で最も気に入っていたのが「スイッチョ猫」という短編と聞く。愛猫家大佛らしい心温まる文章で、何度読んでもほのぼのとしたやさしい気持ちにさせる物語である。

年越しに、どのような本を携えて帰省しようか…この悩みも読むことの楽しみを与える。来る年も、心浮き立つような楽しい本にめぐり合えることを願っている。